



キャンパス・コンソーシアム函館  
合同公開講座

函館学 2024

第3回講座  
講義資料

辺塞詩としての蝦夷漢詩

一幕末道南ゆかりの漢詩人たち

講師：泊 功

函館工業高等専門学校 教授

日時：令和6年9月28日（土）

13：30～15：00

会場：函館工業高等専門学校

主催：キャンパス・コンソーシアム函館



キャンパス・コンソーシアム函館  
合同公開講座

泊 功（とまり こう）

函館工業高等専門学校 教授

講師略歴

1966年 青森県生まれ

2002年 中国吉林省長春にある東北師範大学大学院に留学

2007年 同校より文学博士号の学位を授与

2004年 函館工業高等専門学校教員として勤務、現在に至る

専門は日本漢文、中国SF小説翻訳。後者の仕事としては、劉慈欣『三体Ⅱ』（2020）

『三体Ⅲ』（2021）（共訳。いずれも早川書房、現在はハヤカワ文庫）、劉慈欣『劉慈欣  
短編集 Ⅱ』（共訳、早川書房、2021。現在はハヤカワ文庫）、馬伯庸『兩京十五日』  
（早川書房、2024）など。



『唐詩選』の中の詩  
 辺塞詩の代表作

涼州詞  
 葡萄美酒夜光杯  
 欲飲琵琶馬上催  
 醉臥沙場君莫笑  
 古來征戰幾人回

王昌齡

從軍行  
 青海長雲暗雪山  
 孤城遙望玉門關  
 黃沙百戰穿金甲  
 不破樓蘭終不還

王維

送元二使安西  
 渭城朝雨浥輕塵  
 客舍青青柳色新  
 勸君更盡一杯酒  
 西出陽關無故人

王維

では彼は？

作者は辺境へ行ったことがない

涼州詞  
 王維  
 葡萄美酒 夜光の杯  
 飲まんと欲すれば、琵琶馬上に催す  
 酔ひて沙上に臥す 君笑ふごと莫かれ  
 古來 征戰 幾人か回る

從軍行  
 王昌齡  
 青海の長雲 雪山暗し  
 孤城 遙かに望む 玉門関  
 黄沙 百戦して金甲を穿つも  
 楼蘭を破らずんば終に還らず

送元二の安西に使ひするを送る 王維  
 渭城の朝雨 輕塵を浥し  
 客舎 青々 柳色新たり  
 君に勸む 更に尽くせ一杯の酒  
 西のかた陽関を出つれば故人無からん




三 日本における辺塞詩(上代)

古くは「懷風藻」所収の藤原宇合「奉西海道節度使之作」が知られる。  
 宇合は「持節大將軍」として蝦夷討伐に参加。後、「西海道節度使」を任ずる。結句「幾度か刃兵に倦む」は「一兵士とは言えない宇合の実感と違ふにせよ。リアル派辺塞詩」

奉西海道節度使之作  
 (西海道節度使を奉ずるの作) 藤原宇合  
 往歲東山役 往歲 東山の役  
 今年西海行 今年 西海の行  
 行人一生裏 行人 一生の裏  
 幾度倦刃兵 幾度か刃兵に倦む

三 日本における辺塞詩(江戸期)

古くは「懷風藻」所収の藤原宇合「奉西海道節度使之作」宇合は「持節大將軍」として蝦夷討伐に参加。後、「西海道節度使」を任ずる。結句「幾度か刃兵に倦む」は「一兵士とは言えない宇合の実感と違ふにせよ。リアル派辺塞詩」

江戸期 盛唐詩の模倣  
 本門 祖探門下  
 そもも近世日本で辺塞詩を作り始めたのは祖探門では又本門門下、いわゆる大門の門下であった。山生(○)七37頁)ただし、現存思想がないので、**文学的虚構**。

從軍行  
 室鳩巢(二六五八一七三三)  
 万幕平沙上 轅門落日曛  
 龍城胡騎出 魚海漢軍分  
 鳴鼓連連水 高旗卷卷雲  
 何時清朔漢 師去報明君

塞下曲  
 堀崎松濤(二八一八明治前?)  
 十万人洗不毛  
 胡烽朔雪映弓刀  
 長安城裏遊春子  
 不似征虜汗馬勞

※堀崎松濤もとは松前家の有力家臣下国家の下田藩の一門下家臣可賀であり山生(國)と結婚して堀崎家を創設した。新戦の時からエウロパ動亂、インカ動亂の経験があったことがわかる。

※詩の引用に際しては、通行字体を用いる。

從軍行 室鳩巢  
 万幕 平沙の上  
 轅門 落日 曛(る)  
 龍城 胡騎出でて  
 魚海 漢軍分かる  
 鳴鼓 遠水に連なり  
 高旗 龍雲を巻く  
 何れの時か朔漢を清め  
 帰りに去つて明君に報いん

塞下曲 堀崎松濤  
 十万人の征人 不毛に渉る  
 胡烽 朔雪 弓刀に映す  
 長安城裏 遊春の子  
 征虜 汗馬の勞に似す  
 汗馬勞：戦功

※龍城：匈奴の根拠地  
 ※魚海：地名。現在の内モンゴル阿拉善右旗付近  
 ※龍雲：龍山は陝西省から甘肅省に連なる連山で、匈奴が中原に侵入するのを防備する守備兵が置かれた。そこにかかる雲

八 辺塞詩としての蝦夷漢詩

A 「特異な地理・自然・気象」  
②松前風土 山田三川

節 過 三 春 始 回  
東 風 不 肯 拘 一 日 来  
牡 丹 開 雜 早 梅 開  
二 十 四 番 一 日 来



牡丹

早咲きの紅梅



A③丙寅六月中旬戸切地當中偶作  
(慶応二年 一八六六)

蠣崎松濤(伴茂)

夏 猫 不 夏 有 寒 威  
風 氣 常 多 暑 氣 微  
且 道 管 中 最 冷 涼  
至 今 六 月 日 量 毛 衣

戸切地陣屋大手門  
(北斗市)



陣屋跡は桜の名所  
※且道：試みに言う

B 「アイヌ」異文化との関わり  
④唐大小詩(第一首) 栗本鋤雲

一 場 歌 哭 動 秋 穹  
木 幣 毳 毳 岸 樹 中  
西 隣 暮 老 夷 来 報 道 熊  
旦 祭 難 熊



『蝦夷島奇観』(寛政12年)所載の「熊送り」絵

七 松前廣長(『覆甕草』)  
の先駆的北方辺塞詩

① 己酉之夏兵士征夷東夷

高 旗 飄 北 海  
金 鼓 聞 東 夷  
不 用 干 戈 術  
秋 来 必 斂 師

己酉の夏 兵士 東夷を征す

高旗 北海に飄(ひる)がえり

金鼓 東夷に聞(きこ)ゆる

干戈の術を用ゐずして

秋来 必ず師を斂(をさ)めよ

※己酉：寛政元年(一七八九)。五月クナシリ・ネモロ地方のアイヌが蜂起し、松前藩は銃や大砲を携えて出兵。戦にはならず、他のアイヌの協力で首謀者を捕らえ処分して終結。クナシリ・メナシの戦い。  
※金鼓：中国より渡来した軍陣指揮用の金属楽器(鐘や鼓)と皮製太鼓の類。  
松前廣長(一七四〇〜一八二六)松前藩家老で『松前城守』を編纂するなど、藩政の一の碩学。画家で家老嶋崎宗雪の文字・字間の師。

②松前風土

山田三川

節 三春を過ぎて春始めて回る  
牡丹 開雑して 早梅開く  
東風 肯へて花唇に拘(こたは)らず  
二十四番 一日に来たる

※山田三川(一八〇四〜一八六二)は伊勢の人だが、幕末期松前藩の藩儒(藩校徳典館教授)。用八(天保十年一八三九〜嘉永元年一八四八)を務めた人物。本詩は高崎市立図書館蔵『三川詩集』所収。松前藩での職を辞した後は安中藩の藩儒。新島襄を教えた。  
※三春：孟春・仲春・季春(陰暦一月〜三月)。  
※二十四番：二十四番花信風のこと。春の二十四節気の中の二十四番(花)が記される。表(な)の二(つ)の花(×8)が記される。それそれの花の開花を知らせる風。ちなみに小寒の花は梅。椿・水仙・牡丹は春の最後。驟雨に配せらる。ちなみに北海道では辛夷、モクレン、梅、桜は、ほぼ同時に咲きます。

③丙寅六月中旬戸切地當中偶作  
蠣崎松濤(伴茂)

夏 猶ほ夏ならずして寒威有り  
風 氣 常 に 多 く 暑 氣 微 可 々  
且 (し)ばら く 道 (じ) ふ 當 中 最 も 冷 涼  
今 に 至 る 六 月 毛 衣 を 量 (か) さ ぬ

※丙寅 慶応二年(一八六六)

※蠣崎松濤：(文政元年(一八一八)〜明治初)：親戚筋である下田季隆(すえちか)の子で、波響の孫と結婚して蠣崎別家を興す。学問・文学好きだったようで、中央図書館には「蠣崎文書」のひとつとして、個人詩集である『松濤詩草』をはじめ多くの文書が残される。

※戸切地陣屋：松前藩が北方警備のために、安政二年(一八五〇)北斗野崎に構築した西洋式の出城。四層に火を放ち敵軍の伴茂は詩を詠んだ慶応二年(一八六六)「守備隊長」をしていたが、同年十月には寺社町奉行に転出した。  
※且道：試みに言う。確定的でないことを提示する

④ 一場の歌哭 秋穿を動(じよも)す 栗本鋤雲  
木幣 鈍鈍たり 岸樹の中  
日暮 老夷来りて報道す  
西隣 明豆 雜熊(すうゆう)を祭ると

※栗本鋤雲 一八三二〜一八九七は文久二年(一八六二)箱館奉行所に奉職し、幕命により南千島・樺太を探検した。維新後は詩人・ジャーナリスト。

※木幣：祭祀に使う幣、すなわちイナウ。

※鈍鈍：細長いものが垂れ下がるさま。

※老夷：アイヌの老人。エカシ。

※雜熊：熊送り、イヨマンテ。

13

⑤B 題夷人像 早坂文嶺

断髮 左衽 駄舌 声  
渾家 鮮食 海縦 横  
功名 富貴 総て 意無  
羨爾 獵漁 過一 生

⑤ 夷人像に題す  
断髮 左衽 駄舌の声  
渾家 鮮食して海に縦横す  
功名富貴 総て意無く  
羨むのみ 獵漁して一生を過ぐすを

※早坂文嶺 (一七九七〜一八六七) アイヌ絵を得意とする画家で、山形出身だが弘化年間に松前に来て活躍。

※渾家：一族すべて

14

C⑥ 「刀傷性・種民地性」  
松前城下作 長尾秋水

海城寒橋月生潮  
波際連櫓影揺  
北辰直下建銅標

従此五千三  
浪際連櫓影揺

海城寒橋月生潮  
波際連櫓影揺  
北辰直下建銅標

松前城の入り口付近にある「松前城下作」詩碑  
2024年9月16日撮影

15

⑥ 松前城下の作  
海城の寒橋(かんたく) 月潮よ  
り生じ  
波際の連櫓 影 動揺す  
此より五千三  
北辰直下 銅標を建てん

※寒橋：「橋」は夜回りの時に刻を知らせる拍子木。ここでは寒さを警告する。

※長尾秋水(一七七九〜一八三三)：名を景翰と言ひ、越後村上の人。江戸や水戸で学び、文政三年(一八一九)に松前に渡った。本詩は「松前遊詩」二十首の中の一。現在、松前城天守閣の脇には同詩の碑が建っている(前頁)。秋水はこの一絶によって全篇に勤王詩人として知られるようになった。秋水の波海に先立つ約二〇年前、最上徳内は寛政十年(一七九八)、択捉島に日本の領有を示す「大日本恵登呂府」の標柱を立てている。また、後漢の東漢が交趾を占領したとき、漢の領土という七つを示すために銅標を立てたという。

16

⑦ AC 松前客舎望巖城山 唐土大六 霽春

乘晴極目望郷台  
故国火名雲隔海開  
一峰氷雲生暑送  
三巖氷雲生暑送  
家懸夢裏何人到来  
嶽色依然幾日到  
可堪懷土客愁催

松前城天守閣から見た岩木山  
2024年9月16日撮影

17

晴に乘じて目を極む望郷台  
故国の名山 海を隔てて聞く  
一片の火雲 暑を生じて送り  
三峯の氷雪 江を渡りて来たる  
家 夢裏に懸るも何人か知らん  
嶽 眼中に入るも幾日か知らん  
秀色 依然として千里の影  
堪ふべけんや 土を懐ひて客愁を催すに

※松前客舎：蜀中九日：寛政四年(一七九二)ラクスマンが松前に来航。翌年、幕府は彼らを図録へ回航させ、松前で会談。弘前・南部藩兵が幕府施設警護のために渡った。一八一〇三。警備隊二同行し

※唐土大六 霽春 五九一八〇三。警備隊二同行し

※望郷台 故郷を望む高台。王勃「蜀中九日」の「九月九日望郷台」や、杜甫「望岳」(怒りを遣う)の「地隔望郷台」。地は隔つ望郷台。よるに蜀(四川省)で詠まれた詩に多用され、歌枕として四川省成都付近にあったものだが、歌枕としては津軽地方を望める高台のこと。

※火警：夏雲、岑参「出関経華嚴寺、訪法華雲公寺」(五月山雨熱 三峯火雲蒸。五月 山雨熱く 三峯火雲蒸)句を踏まえるが、大六が松前にいた時期は四月から七月下旬(回曆)と、夏の前期と重な

※三峯：先の岑参の詩では、五岳の一つ華山の連華峰・毛女峰、松嶺峰という三つのピークを指すが、ここでは若木山の三つのピークを指す。若木山は独立峰ではあるが、山頂部は主峰・鳥海山、鏡鬼山の三つのピークに分かれる。

※懷土：故郷を思うこと。『論語』(里仁)「君子懷德、小人懷土」(君子は徳を懐ひ、小人は土を懐

18

堀崎松清『松清詩草』より

送工藤氏二首 東蝦夷クナシリ嶋勤番  
 歌 尤 九郎三衛門也  
 海山万里 幾閨河  
 聞說 辺城 友不多  
 祖席 莫辞 勤杯 酒  
 明朝 好去 慎風 波  
 海山 万里 幾閨河  
 聞說 (きくならく) 辺城 友 多からずと  
 祖席 辞する莫かれ 杯酒を勤むを  
 明朝 去るに好し 風波 慎ふ  
 送 君 話 罷 別 離 愁  
 行 役 親 朋 不 少 留  
 為 祝 首 途 千 万 里  
 明 年 無 恙 大 刀 頭  
 君を送り 話罷み 別離の愁ひ  
 行役 親朋 留むること少なからず  
 為に祝る 首途 千万里  
 明年 恙無く大刀頭

⑩D 蝦夷地へ行く人への送別詩

送人従軍之蝦夷 其三 山梨稲川  
 腰間三尺古青萍  
 壯爾從軍赴北庭  
 万里揚旌臨絕域  
 千帆舳舳渡窮溟  
 異花含露山煙暗  
 絶島連雲海氣腥  
 限界須臾伏波柱  
 勒功誰數孟堅銘

稻川詩草』中、四首連作の三首目

人の従軍して蝦夷に之くを送る  
 腰間 三尺の古青萍  
 壮なるのみ 従軍して北庭に赴くとは  
 万里 旌を揚げて絶域に臨み  
 千帆 舳を舳して窮溟を渡る  
 異花 露を含んで山煙暗く  
 絶島 雲を連ねて海氣 腥 (なまぐさ) し  
 界を限り 須臾標つべし 伏波の柱  
 功を勒 (きざ) ん 誰か数へん 孟堅の銘

※工藤氏：久保泰『松前藩家臣名簿』(一)〇二二 自費出版)に載る工藤九郎左衛門ことと思われる。同書によれば、工藤九郎左衛門は嘉永六年(一八五三)に藩中書院に出仕しているが、同時期に松清も中書院に出仕している、言わば二人は同僚であった。また安政二年(一八五五)にはエトロフ島に出張している記録も残る。本詩は天保十四年(一八四三)の詩中に載せられているので、その折にクナシリ島への出張があったものと考えられる。

※祖席：送別の宴会

※大刀頭：刀環のついた大刀。「環」は「還」と同音で「還る」に通ずるため、この語は「帰還」の隠語として使われる。前漢武帝の時代の武帝李陵は匈奴に降伏していた時、漢の使者としてやってきた友人の任立迪等と面会した。任は李陵に対し、恩赦が出ていて漢に帰還できることを暗に伝えるのに刀環を何度もさすって合図したという。だが、李陵は再び争めを受けるのを避けるために帰還しなかった。